



Title	[23]生きるための知恵
Author(s)	松山, 文生
Citation	満州ハイラル戦記, pp.199-206; 1994
Issue Date	1994-08-31
URL	http://hdl.handle.net/10069/29541
Right	

This document is downloaded at: 2019-07-20T16:03:35Z

生きるための知恵

C 収容所では食糧事情は良かったが、人間の欲望には限度というものがなく、食糧^糧が払いの様な噂を聞いた。食事は毎食ごと一人一人が食券を持って炊事場に行くのが原則であるが、六人の、仲の良い者が集まって一組を作り、交替で一人だけが貰いに行く方法があった。三個の飯盒を並べ、中央の飯盒の吊り輪に、右の飯盒の吊り輪と、左の飯盒の吊り輪を絡ませると、中央の飯盒の吊り輪を持つだけで、三個の飯盒をぶら下げることが出来る。右手に三個、左手に三個の飯盒を一人で持つて六人分の食券を受け取って帰れるのである。理論的にはそうだが、それが巧く行かないから話は面白くなるのである。

六人分の飯盒を下げた兵隊が炊事場から自分の兵舎に帰る途中、泥棒がいて、他の兵舎の横からスプーンを持って現れて、飯盒の中のカーシャ（お粥）を掬って、どんどん食べるのだそうだ。「コラッ、コラッ」と飯盒を持った兵隊は怒鳴るが、泥棒は掬って食べるのを止めもしな

い。飯盒を持った兵隊は腹がたつので、六個の飯盒を地面に置いて、泥棒を追い掛けて行くと巧く逃げられてしまい、がっかりして帰って来ると、六個の飯盒が全部なくなっており、泣くに泣けない状況になるらしいのである。それで、六個の飯盒を一人で持つて行く時には、右と左に兵隊が一人ずつついて、食べに来る泥棒を追い払う役をしたと言うから、これはもう完全に漫画である。

朝、暗い頃中隊ごとに黒パンを数名で炊事場に受け取りに行き、各人が胸の前に抱くようにして中隊に帰るのであるが、兵舎の横から唐突に泥棒が飛び出してきて、黒パンを持つている兵に体当たりして倒し、散らばった黒パンを盗んで逃げることもあったという。

ある兵隊が乏しい給料を貯めて黒パンを一本買い、翌日、腹一杯食べるのを楽しみにして、それを枕にして寝た。黒パンは私達が日本で食べる食パンくらいの大きさで、約長さが四十七センチメートルくらいあり、硬くて十分枕にすることが出来る。朝、起きてみたらその兵隊の頭が落ちない程度、残されて他は総て誰かに食べられていたというから泣けてくる。

一番大掛かりだったのは、夜、兵隊が、ある中隊（仮にN中隊と名付けよう）を訪れ、「黒パンの受け取り票の偽物が出ていますので、明日の朝の黒パン受領の時は、この書類を持って来て下さい」と言って、本物の受け取り証を貰い、偽の受け取り証を渡した事件であった。翌朝、N中隊の者が行くと一個中隊全員の黒パンが既に受領済みとなって盗まれており大変な騒ぎと

なつた。これは間もなく犯人が分かり処罰された。

ソ連は私達将校がいっしょにいるのを好かないのか、よく離散集合させられた。私がC收容所に来た時、始めは、日本軍の收容所本部の事務係の下士官、兵隊の起居している兵舎に寝とまりさせられた。私の左には陸軍士官学校を卒業した五十歳位の兵科の中尉の人がいた。

この陸軍士官学校出身の中尉殿は何故軍隊を辞めたのか、分からなかったが、以前から下士官の話では陸軍を停年で辞めた大佐などが、東京では長屋の奥あたりから出てくるのを見て、将校の将来に幻滅を感じたからだということであった。

ある日、陸軍士官学校出身の若い少尉が二人私達の收容所に何処からか転属して来て、彼らが私達に対して、「名誉ある将校団の一員となりまして」と型通りの挨拶をした時、「名誉ある将校団か」と老中尉は微笑しながら呟いていたから、老中尉にとって、陸軍は決して居心地の良い所ではなかったのであろう。「陸軍士官学校の同期生で参謀本部の連絡係で東京と南方総軍との間を飛行機で行ったり来たりして、郵便配達みたいな仕事をしていたのが、参謀になつたりするんだから」とちよつぱり批判めいたことも口にしていた。老中尉の歩いている回りに「は諦観みたいなものが感じられた。」

変わった二人の下士官と一人の兵隊がいた。彼らはソ連の奥地の收容所にいたらしいが、満州に帰り、日本再興を図ろうと、周到的な準備をして炊事の下水道を通つて收容所を抜け出し、

ソ連内を満州に向かつて進んだと言っていたが、何日か歩いて山を越えようとしたところで、銃を持ったソ連の民警にずらつと囲まれて捕まってしまった、と言っていた。勇敢な兵隊がいたものである。

体格の良い民間人が一人いたが、私に「日本が敗戦にならなければ、自分は日本の故郷の県で一〇番以内に入る大金持ちであったのだが」と言っていた。彼はジャムスの付近にいたということであつた。そこに満州人にとても慕われていた土建業者がいたそうであるが、敗戦の一年くらい前に満州人達の願いも聞き入れず、内地に引き揚げて帰つた人がいたということをお話してくれた。先を見る目があつたのである。人間にとつて一番大切な事は、先が予見できる能力を持っているかいないかではないかという気がした。

ある日、ソ連の衛生監視員のような将校が来て、兵舎の掃除をしてきれいにしろといった。将校も下士官も兵隊も一緒になつて一生懸命掃除をしたが、検査員はハラシヨーと言つてくれない。床を使つていない家の白木の床のようにしろのである。寝床の板を外して、水を流して、ガラス片で削つて汚れを落としても、検査に通らない。皆うんざりしてしまつた。誰かが魚でも渡したらどうかと言ひ出して、試みに魚を何匹か渡したら、検査にパスした。どこでも賄賂が通用することが分かつて私には興味深かつた。

ソ連の收容所長が、彼の所有している牛を一頭、日本の将校団に買わないかといつてきた。

私達は取り合えず今の所腹も余り減っていないし、一人当りの負担する金も馬鹿にならないので、「買わない」と返事したら、ソ連の兵隊が收容所の入り口の番兵にいたるまで皆、日本人が頼んだ煙草を買いに行ってくれなくなった。私達は始めは樂觀していたが、煙草が段々不足してくると、そう、のうのうとも、しておれなくなり、矢張り收容所の牛を買いおうかと言う話になり、通訳を通じてその旨伝えたら、直ぐ煙草もソ連の兵隊が買ってきてくれるようになり、私達はソ連の人々の現金なのにあきれた。立派な人格者と思っていた收容所長さえ、そうなのだから他はおして知るべしである。

将校宿舎で私の左にはDという准尉がいた。Dはどこかの商船学校出身で、一等航海士の免状を持ち、海軍では兵曹長の位を持っていたというので、准尉として待遇されていたのである。よい人で私はこの人から船について大分教えて貰った。私が「船は客船が面白いでしょう」と尋ねたら、「客船は客が多くてうるさいですよ」との返事で、なるほど、そんなものかもしれないと私に改めて世の中を見る目を開かせてくれた。Dは貨物船に乗って非番の時間は写真の現像とか焼き付けをしてのんびり過ごしていたということだ。敗戦前は満州の高等文官試験のよなものに合格して税関吏をしていたそうだ。満州の営口にもいて、布の鑑別をしたこともあるらしい。火を付けて燃やせば布が綿か絹か毛か分かるが、口でなめて見分けられないかと考えて、実際にやってみたらある程度は分かるようになったと話してくれた。

安東の朝鮮人の税関吏で密輸を見付ける名人がいて、日本の陸軍の佐官が密輸を発見され、便所で拳銃自殺をしたという話もしてくれた。その税関吏はトランクの品物を見る振りをして、旅客の足元をみているのだそうだ。密輸をしている旅客は必ずズボンの裾が震えているので、それを見逃さずに調べを進めて行き摘発するらしい。そうかも知れないと、この話には頷かせるところがある。と言うのは、私には思い当たる経験があるからである。専門学校一年生の頃であった。私は釜山から関釜連絡船に乗り込もうとしていた。長崎にいる友達への土産に朝鮮の「みどり」という煙草を一〇箱鞆の中に入れていた。私は未成年であるので、煙草を吸うことができない。煙草を持ち込んでも、没収されるだけである。それ故、連絡船に乗っても三等船室入口の前に机を置いて坐っている税関吏の目を誤魔化して通るのは、勇気のいることであつた。しかし、友達に一番喜ばれる土産品は煙草であつた。どうしたらよいか私はハムレッツトの如く悩んだ。私の前に二十二、二十三歳の青年が並んでいた。人の良さそうな男なので、彼に私の鞆と彼のトランクを替えてくれないか、そして連絡船に乗ってからまた交換しようともちかけた。

彼は嫌な顔もせず「いいですよ」と言つたので、私は彼のトランクを持ち、彼は私の鞆を持って、連絡船に乗つた。連絡船に乗つてみると、彼は二等船室であつた。私は三等船室だから連絡船に乗ると、直ぐ右と左に別れた。

私はちよつとまずいな、どうしようかと考えたが仕方がないので、「後で交換しましょう」と彼に小声で囁いて、三等船室に向かい、税関吏の前も平気で通り抜けて、船室に降りて行つた。船が出港して彼の名前を聞いていないのに気づいた。私は同じ三等船客と思つていたので、船室の中で簡単に交換できるものと、安心してゐたのが不覚であつたのである。困惑した私は失礼とは重々承知してゐたが、この場合止むを得ないと自分自身に言い聞かせ、彼の名前を知ろうとして、彼のトランクの蓋を開けた。仰天したのは私であつた。「ウエストミンスター」という外国製の煙草がびっしり詰まつてゐた。姓名は分からない。「やんぬるかな。凶られたるは我なりしか」と私は嘆息した。

驚いたばかりでは、おられない。すぐさま通りかかつたボーイを呼んで、「二等室に鞆とトランクを交換された方はいませんかと聞いて、このトランクを鞆に代えてきてくれ」と頼み、彼の年、恰好を教えて、ボーイのポケットに五〇錢銀貨を一枚入れた。間もなくボーイの手によつて「みどり」が一〇箱入つてゐる私の古ぼけた鞆は返つてきた。ヤレヤレである。それにしても私は思う。何と彼の騙し上手であつたことかと。

D准尉の長男は勉強がよく出来て、海軍兵学校に入学してゐた。敗戦後、その長男がどうなるかひどく心配してゐた。私はD准尉に「戦争に負けたが、今後の日本の再建に必要なのは頭の良い人です。お宅の坊ちゃんもきつと何処かの大学に入られて、勉強しておられると思いま

すから、大丈夫ですよ」と慰めた。彼は私と一緒に復員したが、私の予言通りだったので、安心したことと思つてゐる。

D 准尉のさらに左にWと言う准尉がいた。彼は毎日砂掘り作業に行つてゐた。ある夕方、上機嫌で帰つて来て「今日は砂掘りの能率が上がつて、明日の分も掘つてきた」と大喜びしてゐた。翌日がつかりした姿で帰つてきたので、私が「どうしたのですか」と尋ねたら「昨夜、砂泥棒がやつて来て、監視人夫婦の手、足を縛り、積み上げた砂を全部持つて行つてしまつた」としょぼりしてゐた。社会主義国には泥棒もいるのである。いささか私は驚いた。

私達の部屋の二階に何時頃か忘れたが、F 陸軍主計大尉が他の収容所からやつて来た。彼は陸軍省の経理部にいたが、敗戦後、関東軍の経理部の事務処理を命じられ、新京にわざわざ東京からやつて来て所命の仕事をしている内にソ連軍に捕まり抑留の憂き目にあつたらしい。箱入りの立派な麻雀牌を持つてゐた。F 陸軍主計大尉はソ連の収容所の職員に「日本で俺より偉い奴は十二人しかいない」と言い、ソ連人がたまげて日本人の通訳に聞いたので、私達もことの次第を知つたのであつた。彼は陸軍経理学校の入学試験がひどく難しかったので、そんな風に考えたのかもしれないが、戦後四十三年経つた今でも陸軍経理学校出身の著名人を見ないところから考えると、彼が錯覚して、当時そのように思つていたのであろう。勉強の出来る者が偉いとは限らないことが私にはよく分かつた。